

リビング・オブ・ザ・イヤー 2018 大賞は「クロスハート石名坂・藤沢」

7ホームが会場でプレゼンテーション

高齢者住宅経営者連絡協議会(高経協)主催の、第5回リビング・オブ・ザ・イヤー(LOY)2018の最終審査が10月13日、日経ホールで開催された。

一般聴衆や介護関係者、登壇者の応援団など大勢の方々が入場し、会場は熱気に包まれた。2次審査を勝ち上がった7ホームが、取り組み姿勢や運営内容を10分間にまとめたプレゼンテーションを行い、一般・介護関係者・有識者ら事前に選ばれた100人の選考委員が各1票を投じて大賞を選ぶ方式で、今年のLOY大賞は、社会福祉法人伸こう福祉会が運営する神奈川県藤沢市の介護付有料老人ホーム「クロスハート石名坂・藤沢」が受賞した。

審査委員が経営者目線で選考

1次審査は、高経協会員である審査委員21人によるエントリーシートの書類審査だ。応募したすべてのホームから各委員が21ホームを選び集計、上位21ホームが2次審査に進む。1位の「アズハイム練馬ガーデン」は21票中20票を集めた。2位は「NRE大森弥生ハイツ」(19票)、3位は「アライブ浜田山」「グループホームひなたぼっこ」「そんぼの家神戸伊川谷」「マザアスカセンター在宅ホスピス南柏」の4ホームが18票で並んだ。21位も4ホームが12票で並んだため、合計24ホームが2次審査に進んだ。

2次審査は、審査委員21人が3人ずつ7チームに分かれ、各チームに振り分けられた3～4ホームを訪問して行った。この段階で辞退した「リライフ白山」を除いた計23ホームの見学審査をし、各チームが1ホームを最終審査に推薦した。

Aチームの審査委員(敬称略)の麻生(京王)、吉田(エムスリー)、水谷(生活クラブ)は、3ホームのなかから「アズハイム練馬ガーデン」(介護付)を選出、同様にBチームの佐藤(フージャース)、佐塚(アース)、田村(タムラプランニング)は「NRE大森弥生ハイツ」(介護付)を、Cチームの高山(大和ハウス)、片山(伸こう福祉会)、森田(AIP)は「アライブ浜田山」(介護付)、Dチームの坂手(リエイ)、福元(スミリン)、山本(スーパーコート)は「クロスハート石名坂・藤沢」(介護付)、Eチームの本間(和啓会)、中村(キャピタルメディカ)、幸谷(長谷工)は4ホームのなかから特養ホーム「せいりょう姫島」、Fチームの大谷(はなまる会)、森野(ツクイ)、昆野(日本の介護)は

4ホームのなかから「コンシユール舞浜」(介護付)、Gチームの菊井(SOMPOケア)、森川(オリックス)、山木(ネクサスケア)が3ホームのなかから「クラッチファミリア古淵」(介護付)をそれぞれ選出し、審査委員全員による会議で選考経緯を説明し、侃々諤々の議論の末、7ホームを最終選考した。審査委員の選考目線は、何かが際立ったホームというよりも、経営者として自らのホームがめざすべき指標となるところに注目し選出した感がある。

高齢者へのインパクトに大きな期待

最終投票では、有効投票数99票のうち、大賞受賞の「クロスハート石名坂・藤沢」が35票を獲得、おおよそ3人に1人が投票した。次点の「NRE大森弥生ハイツ」は21票、3位「クラッチファミリア古淵」の15票と大差が開いた。

入居者の働く場を確保し、そこから収入が得られるとしたら入居者の喜びは大きい。支えられる側から社会を支える側に立場を変えることは、高齢者にとって生きるうえでの大きなインパクトになる。この実践を試みた「クロスハート石名坂・藤沢」が評価された。実践は緒に就いたばかりだが、得票数からその期待の大きさがうかがえる。

次点となったが、ホームと地域とのつながりを深めてきた「NRE大森弥生ハイツ」は大賞に匹敵する。ホーム内の共用スペースを地域の人たちが自由に利用でき、常時、地域住民が行き来するという事は、入居者が地域に出かけたときにも地域の見守りが十分機能するという事になる。入居者の活動範囲が自然に広がっていくこの取り組みは、今後多くのホームが見習うべきだろう。

ホーム運営の朴訥な発表会から始まったLOYは、今や映像や音楽も活用して持ち時間10分間をフルに使い切る発表が多くなり、プレゼンが高度化してきた。来年は心に刺さり、余韻に浸れるような感動を期待したい。



Name 田村 明 孝

たむら・あきたか

Profile タムラプランニング&オペレーティング代表。有料老人ホームなどの開設コンサルティングのほか、全国の高齢者施設、介護保険居宅サービス、自治体の介護保険事業計画のデータベースの収集・販売などを手がける。高齢者住宅連絡協議会総監督。